

フッサールとハイデガー

——ケアという事象をめぐる——

榊原哲也(東京大学)

「ケア(care)」という事象はきわめて多様である。その営みは、子供の世話や病人の看護のみならず、庭の手入れや、道具の丁寧な取扱い、さらには引っ越しの際の家具の養生などにも及ぶ。ここではしかし、そうしたケアの営みの全体を扱うことは到底できない。本発表では、私がここ10年余り積極的に関わってきた「看護ケア」に焦点を絞り、とりわけ看護師と患者との関わりに関するいくつかの側面を、フッサールとハイデガーのテキストを参照しつつ、明らかにして見たい。

その際、本考察において私は、「向き合う」と「寄り添う」という二つの概念を導入しようと思う。というのも、私がこれまで関わり、経験を伺ってきた看護師たちが、自らのケアの経験を語る時、しばしばこの「向き合う」と「寄り添う」という表現を——「患者さん(やそのご家族)に向き合う」、「患者さん(やそのご家族)に寄り添う」という形で——用いるからである。彼女たちは、患者を理解し、良いケアをするためには、患者に向き合うだけでなく、患者がそうありたいと思う在り方でいられるよう、寄り添っていかなければならない、という趣旨のことを語る。私にはこの「向き合う」と「寄り添う」という二つの表現で言われている事柄が彼女たちのケアの営みの、少なくとも二つの本質的契機を成しているように思われるのである。

むろん、「向き合う」と「寄り添う」とは、表現が異なるからと言って、完全に切り離されうる二つの営みであるわけではない。実際には看護師たちは、患者(やその家族)に向き合ったり寄り添ったりしてケアしており、看護師たち自身にとっても両契機は切り離せないものとして捉えられているようである。けれども、現象学的に見た場合、二つの表現は全く異なる志向性の方向を示している。「向き合う」関係では、一人称単数の「われ」が二人称単数の「汝」(あるいは二人称複数の「汝たち」)に「向き合い」、「われ」が「汝(たち)」を見つめ、「汝(たち)」が「われ」を見つめることになるが、「寄り添う」関係においては、われと汝が向き合うのではなく、一人称複数の「われわれ」が同じ方向を目指し共に歩もうとすることになるからである。

そこで本発表では、看護ケアの営みにおけるこの「向き合う」と「寄り添う」という二つの契機を、フッサールとハイデガーのテキストを参照しつつ、また看護研究における事例をも参照しながら、明らかにすることを試みたい。